* * * *

中国科学院昆明植物研究所に所蔵されているヒムロゴケ科蘚類標本の報告である。4属8種があるが，その中 *Pterobryopsis orientalis, P. acuminata, Calyptothecium wightii, C. hookeri* の4種は東南アジアの熱帯域では珍しいものではない。他の4種の中 *Calyptothecium phyllogonioides*（新種）は，葉が扁平に着いて，あたかも2列に着いているように見えるので *Phyllogonium* 属の蘚類に似た外観を示す。*Garovaglia crispata* は以前に *G. latifolia* var. *annamensis* としてベトナム南部から知られていたもので，種名としては *G. crispata* が用いられる。*Garovaglia elegans* は多型的な種で，チベットの Dexing 産は，第2次茎の上方と下方で同じような葉が同じように密生するもので，その新変種とした。*Porotrichum tripinnatum* は *Pseudopterobryum tenuicuspes* と同種であることがわかった。

---

□徳田　廣・大野正夫・小河久朗：**海藻資源養殖学** 354 pp. 1987. 緑書房，東京. ¥5500. 生活史の解明に伴い海藻の養殖技術が飛躍的に進歩してきた。生活史解明の手がかりが得られた昭和24年当時は年間生産高が10億枚にも満たなかった浅草海苔が，貝殻を穿孔する胞子体の発見から，人工タネ付け，タネの人工保存など，新しい技術が次々と開発され，昭和40年代後半には60億枚から100億枚に達するようになったのはその良い例である。海藻の養殖技術の小冊子はかなりの数刊行されているが，生活史，生理，生態なども取り入れた，いわば理論と実際を総括的に記述した本はなく，その出現が待たれていた。三人の水産植物学者がこの願いを満たしてくれた。本書は9章から成る。1章．地球の生態系と海藻，2章．生育環境，3章．海藻の利用，4章．海藻資源と生産量，5・6章が主章で，5章で有用海藻ヒトエグサ，アオノリ，コンブ，ワカメ，ヒジキ，マツモ，アマノリ（アサクサノリ），フノリ，テングサの生活史，生態，養殖法，将来の展望などが，6章でアラメ，カジメ，ホンダワラ類，アマモ類など，藻場植物の生活史，藻場造成法などが詳述される。続く7章は海外の海藻養殖の現状，8章は海藻養殖の将来と展望，9章は品種の育成，バイオテクノロジーなどである。最近，海外でも海藻養殖や藻場造成が注目されるようになったが，現状ではこの方面の知識や技術は日本の独壇場である。引用の研究データ，統計資料及び文献は豊富であり，巻末には150余の用語の解説が付される。水産に携わる人以外にも参考書・啓蒙書として薦められる。

（千原光雄）